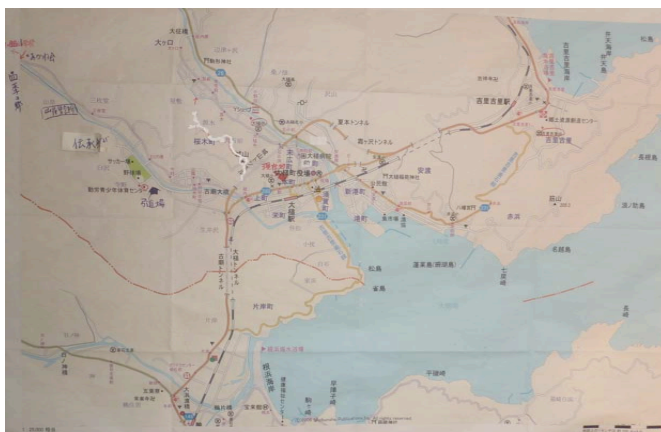


<大槌町訪問記 2011.11/28~29>



大槌町は岩手県上閉伊郡の太平洋側にあります。震災前の人口は約1万5千人、井上ひさしの長編小説「吉里吉里人」をきっかけに地域おこしの一環としてミニ独立国「吉里吉里国」宣言をしたこともかつて話題になった町です。しかし、3.11の地震が引き起こした大津波とそれによって発生した火災により死者802人、行方不明505人（12/7現在）、3717世帯が全壊または半壊と壊滅的被害を受けました。町長さんはじめ市の職員の方も会議中に津波に吞まれ、課長クラスの職員が全員行方不明となったため、行政機能も麻痺状態でした。震災から8ヶ月以上が経過した11月末に訪ねた時には、瓦礫はかなり片付けられて集積され、建物の土台だけが残る風景が広がっていました。

役場は流されてしまったので、大槌小学校の校庭に建てられた仮設庁舎でした。隣の大槌小学校の校舎は津波で流れてきた火災により黒く焼けこげた姿で建っていました。図書館や他のコンクリートの建物も中は何もなくなって柱だけが残っています。



大槌小学校



仮設の町役場



↑大槌保育園内

↓吉里吉里保育園



大槌保育園と吉里吉里保育園は園舎が全壊しました。今は仮設園舎でしたが、子どもたちは笑顔で挨拶してくれました。大槌保育園のプレハブの園舎は冬になったらとても寒そうです。園長先生にお話を伺ったところ、どちらの園も3.11以前に頻発していた地震に警戒し、避難訓練を直前にも行っていたそうです。地震の起こった時間は子どもたちがちょうど昼寝から目覚めた直後で、パジャマの上にジャンパーを羽織らせ、必死で山を登ったそうです。ただならぬ事態を感じた子どもたちは、泣いたり騒いだりせずに保育士さんたちと無事に避難しましたが、おうちの方が迎えに来て家に帰って亡くなってしまった子もいました。



私たちを案内してくれた笑顔の素敵な女性 H さんも会社や自宅を流されてしまいました。海辺に近い場所にある会社のバスを、なんとか2台救ったとのことでした。支援のボランティア受け入れのまとめ役をしている若社長 K さんもお父さんを亡くされましたが、町の復興に全力を注がれています。町には今宿泊できるところがないので、ボランティアバスが遠野から毎日ボランティアの人たちを乗せてきていました。町に唯一の大型スーパーも津波の被害で休業中でしたが、

躯体はしっかりと残っていたので、12月オープンに向けて工事が進んでいました。

川にかかっていた山田線の鉄橋もありません。東大海洋研究所の裏に漁船が打ち上げられたままになっていました。ひょっこりひょうたん島のモデルになった蓬莱島は、ひょうたん型の島の形を残していましたが、灯台が根元から折れてしまいました。以前は防波堤でつながっていましたが、今は浜からは渡れません。



最後に訪ねた教育委員会のある大槌町中央公民館は山の上にあります。その一室に収集して整理された写真や記念のトロフィー、色紙など思い出の品々が展示され、持ち主の迎えを待っていました。これだけの量を修復して整理する労力はたいへんなものです。ここでずっと支援を続けている NGO のパレスチナ子どもキャンペーンのボランティアです。これから3月までに児童館をつくるそうです。

「一日も早い復興を」などと軽々しく口にできませんでした。今はとにかく前をみて日々の生活を築いていくことで精一杯です。この町の未来の担い手となる子どもたちをささやかながら応援し続けていきたいと思います。

(佐々木 香)



写真協力：清水博。(アースマザー)

